たとえリセットされても

ロボットの気持ち

４年　Ｍ・Ｋさん

この本を読み終えたあと、自分が実はロボットだったらと考えてみました。そうしたら去年の記おくは全てうそで、あると思っている自分の命もうそということになってしまいます。そして今感じているのはにせものの気持ちなのだろうか、それなら今、実さいに感じている気持ちは何だろうと考えてみました。

本には愛が自分で考えて選ぶ場面があります。つまり愛は考えられます。次に気持ちです。「ごめん」は気持ちを表す言葉ですが、お母さんにそれを加えるように言われているので、気持ちとしては言っていないと思いました。つまり、気持ちは、ないということだと思いました。私の場合は、悲しいときには泣くし、イヤなときにはきょひをします。しかし愛は泣きません。悲しいという感じょうさえも考えた気持ちなのではないでしょうか。もし、悲しくて泣く今の私が実はロボットだったら、悲しいと考えた時はなみだを流すプログラムがセットされているのかもしれません。そう考えると、自分が本当に人間なのか、ロボットなのかさえわからなくなってきました。

この本の中に出てくる人はみんな、不安やイヤだなという気持ちを持っています。しかし愛はお母さんの病気をいやすロボットなので、とくにプラスの気持ちを多く表げんするようにプログラムされていたのかもしれません。だから、私が忘れ物をして不安な気持ちになったりテストで悪い点を取って悲しくなったりするのは、人間だからこそなのだなと思いました。

もし私がロボットだったら、リレーの選手になったり絵がとても上手にかけたりして、みんなに「すごいね」と言われてうれしいかもしれません。でも、その「うれしい」ですら本当の気持ちではなくて、プログラムによって考えられた気持ちなのです。それは感じていないことと同じで、そこに私自身はいないのと同じではないかと思います。愛のおかげで愛のお母さんは幸せな気持ちになれるかもしれませんが、愛自身はすごくさみしいそんざいだなと思いました。